

景観フォーラム

巻頭言

謹賀新年 2023年(令和5年)が始まりました。しかし、新年を祝う気持ちは全く沸いてきません。そう、ロシアによるウクライナ侵攻が終わらないからです。プーチンという悪魔と化した輩が今や原爆を使おうとして世界を脅しております。戦争のことを念頭にした場合、景観について何を考えたらいいのでしょうか。

先般、バビ・ヤール(BABI YAR)というドキュメント映画を観てきました。ご存じの方もおられるかと思いますが、このバビ・ヤールとは地名でウクライナの首都キエフ近郊の地だそうです。ナチスドイツは1941年9月19日首都キエフを占領し、ソ連統治下で困窮していたキエフ市民は彼らを受け入れはじめました。そんな中、9月24日にキエフで大規模な爆発事故が起き、ソ連がキエフから撤退する直前にナチス相手に仕掛けた爆弾を遠隔操作で爆破したのですが、ユダヤ人に偏見を持っていたキエフ市民は、多くの市民を巻き込んだこのテロの疑いの目をユダヤ人に向けました。翌日、当局はキエフに住むユダヤ人に出頭命令を出しました。即ち、ナチスとウクライナの警察部隊が協力して、9月29日から30日の2日間にかけてキエフに住む33,771名の老若男女のユダヤ人をこのバビ・ヤールという地で射殺したということです。これは、ホロコーストにおいてこの一件のみで最も多くの犠牲者を出した人類史上最悪の事件であると言われております。キエフに普通に暮らしていたキエフ市民であるユダヤ人を、同じキエフに普通に暮らしていた一般のキエフ市民はこのホロコーストを見て見ぬふりをしたということです。なんとというんでもない悲劇が起きたことでしょうか。戦争は平気で普通の市民を狂気に至らしめるという事実がここに提示されております。

戦争はあらゆる手段を用いて最悪のことを成し遂げます。戦争そのものは悪であり、戦争の風景は何かと論じ得るかもしれませんが、戦争の景観はあり得ません。風景は善も悪もすべてを表現しますが、景観は悪を表現できません。善のみを提示するしか出来ないのです。善い景観を求めるために善い景観を論じますが、悪い景観を求めないがために悪い景観は論じないからです。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2022年度年間スケジュール>

*2022年度とは2022年4月1日⇒2023年3月31日のことです。

2022年

- 4月12日(火) 15:00 東京都訪問(神宮外苑再開発を問う)
- 4月19日(火) 16:00 オンライン会議 **第1回景観研究会**
- 5月20日(金) **第1回景観まちあるき**(神宮外苑・表参道)
- 6月21日(火) 16:30 オンライン会議 **第2回景観研究会 第1回理事会**
- 7月26日(火) 16:30 オンライン会議 **第3回景観研究会**
- 8月20日(土) / 8月21日(日) **特別景観視察会**(斑尾高原)
- 8月30日(火) 16:30 オンライン会議 **第4回景観研究会**
- 9月24日(土) **第2回景観まちあるき**(王子・駒込界限)
- 10月25日(火) 16:30 オンライン会議 **第5回景観研究会**
- 11月29日(火) 16:30 オンライン会議 **第6回景観研究会**
- 12月3日(土) **第3回景観まちあるき**(神保町界限)
- 12月27日(火) 16:30 オンライン忘年会

2023年

- 1月21日(土) **第4回景観まちあるき**(茅ヶ崎)
- 2月21日(火) 16:30 オンライン会議 **第7回景観研究会 第2回理事会**
- 3月25日(土) **第5回景観まちあるき**(検討中)

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

<路面電車に乗って3> 新旧入り混じる福井市街の中心

豊村泰彦



プロローグ

私は10歳まで東京都世田谷区の若林に住んでいた。若林と言ってもすぐ分かる人は少ないが、東急世田谷線の三軒茶屋から二つ目と説明したほうが位置的には理解してもらえらるだろう。当時世田谷線は玉川線という名称であり、通称「玉電」と呼ばれていた。今の世田谷線は三軒茶屋と下高井戸間を走行するが、「玉電」は渋谷と二子玉川園（現在の二子玉川）間の道路を併用軌道で走り、途中の三軒茶屋から下高井戸にかけて専用軌道の支線が延びていた。1969年以降は新玉川線（現在の田園都市線の一部）の開通にともない廃止となり、三軒茶屋～下高井戸間が残り、世田谷線として今に至っている。

1960年代当時の若林の住人の移動手段は専ら玉電だった。私も母親に手を引かれて渋谷の東横デパート（1885-1964）まで玉電でよく買い物に行ったが、車窓から眺める景色には毎回ワクワクさせられた。乗車した若林から三軒茶屋までは専用軌道を走っているがここから広い国道246号に乗り出しその真ん中を進む。バスやトラック自家用車などで賑わう一般道路はまるでサバンナ地帯である。その中をゆったり進む玉川線の堂々たる姿に幾度となく感動していたのだろう。当時は床も窓も手摺も木製だったのを記憶している。また、通っていた小学校は玉電の踏切の先にあり、玉電の走る姿を毎日のように眺めているうちに、いつしか路面電車が好きになっていったのである。おそらく沿線の地域住民は玉電には特別な愛着を持っていると思う。



福井の路面電車

路面電車は、全国に17都市にあり、それぞれ地域の重要な移動手段となっている。全盛期の1930年代には、全国で67都市にあった。今ではだいぶ少なくなったとはいえ、現在運行している路線は赤字経営で厳しい事情はあるが、地域の応援を受けながら粘り強く活動している。

さて今回紹介するのは福井県の路面電車である福井鉄道福武線（ふくぶせん）である。福井県越前市の越前武生駅から福井市の田原町駅までの鉄道および軌道路線だが、途中の福井城址大名町駅から分岐して福井駅西口広場にある停留場までを軌道路線で結んでいる。福井駅は北陸新幹線の延伸開業を間近に控え、未来都市へ変貌しようとしているが、そこに待ったをかけるように恐竜の巨大モニュメントが立ちはだかる。福井県では数多くの恐竜の化石が発見され、恐竜の里として売り出していることからこのモニュメントは重要である。どころか恐竜が生きていた古代のイメージもアピールしなければならない。しかし、駅前再開発では商業、ビジネス、レジデンス空間を詰め込んだ30階近い巨大ビル群を主体とする新しい都市建設が進行しており、完成した暁には恐竜の古代世界と近未来が並立する福井独自の都市景観が誕生するであろう。そのなかに遠慮がちに昭和の匂いがする路面電車が行き来する風景もなかなか乙なものになるかもしれない。



福井駅前

福井人の気質？

福井の路面電車は、大正13年開業で、現在使用する車両のタイプは超低床車両の1000形から、他で走行していた車両の改良型まで5種類ほど。超低床型は、3車体接続・3台車方式で、「FUKURAM」（フクラム）の愛称を持つ。

福井市の中心街では道路上を車道と併用で走るが、郊外では専用軌道となる。特に福井駅から三つ目の田原駅から東尋坊方面へつながるえちぜん鉄道三国線と相互乗り入れをしている区間があり、ここでは低床車両が一般車両のレールを走る。しかも一般鉄道並みのスピードを出し、急行では路面電車が駅を通過する。路面電車の急行というのは珍しいのではなからうか。路面電車というと、どうしても街中をゆっくり走行するというイメージがあるが、福井の路面電車はスピードも相当出すのだ。

福井人の気質は、一般に勤勉で粘り強い反面「ケチ」で「せっかち」な面もあるという。もしかするとスピードを出したり、路面電車に急行列車にしたりするのはそんな気質が働いているのかもしれない。



速度が速い

私は福井市の中心の福井城址大名町から鷲塚針原に向かう電車に乗ったが、二つ目の田原町から先ははえちぜん鉄道との共有レーンに入る。このレーンに入ると路面電車は専用レーンで速度を一段上げ、うなりをあげて疾走する。すると、車両全体が揺れだし、吊革や手すりをつかんでいても少し怖いくらいに感じる。急行だと、最高時速 70 km で走行するのだから路面電車とは到底思えない。同じ北陸の富山県には富山市と高岡市の二つの都市に路面電車があるが、道路上でも専用レールでも比較的ゆったり走るイメージだったと思う。

そんなにスピードを出しても故障はしないのか少々疑問を感じる。1000 形車両は日本で製作されているものだが、ドイツの車両製造メーカーがライセンスを保持しているため、部品の一部はドイツの製品が使われている。そのため故障すればドイツから部品を取り寄せて修理こともあり、回復するまでかなり日数がかかるらしい。



路面電車と景観

路面電車が通る街はなぜか良い街に見える。路面電車が景観のレベルを上げるのに貢献しているとしたら、その理由はなんだろうか。車とは違った鉄道の重量感に加え、街に華やかさやノスタルジーを呼び起こすデザイン性にあるのかもしれない。最近多くなった超低床 1000 形の路面電車では、特徴的なのは車両のボディーカラーである。路面電車はできた当初から街になじむような渋い色が使われてきたが、新しいタイプの車両は赤や青や

黄など多彩な色彩と模様が使われるようになった。そのために道路がおしゃれな空間に変貌してきた。今の路面電車は道路上ではひたすら目立ち、魅力的で、それが道路空間に活気を与えているのだろう。



1000形超低床路面電車

変わる街のデザイン

1000形タイプのもう一つの特徴は、バリアフリーに対応するためプラットフォームに高さがなくても乗降できる超低床性であり、これが路面電車のスタンダードなスタイルになりつつある。東京都荒川線や東急世田谷線では、双方とも専用軌道の比率が高いことから、超低床にしなくてもプラットフォームの高さを嵩上げすることでバリアフリーにできる。しかし、最近の新しい車両は低床型の1000形と外観が似てきたように思う。例えば都電の8800系などは低床ではないが見かけ状は1000型に似ているし、世田谷線のほうも新しいタイプの電車には超低床型の形状に似ている車両もある。低床型は今や路面電車のスタンダードなスタイルになりつつありあるのは確かで、人にやさしい街の象徴としてシンボライズされてくるのであろう。



エピローグ

路面電車を通る街の景観は、石畳を敷いた道路、道路に接して設けられた歩道、さらにその外側に沿って建設される重厚な建造物などと協調しながら組み上げられてきた。それは市民の暮らしのなかで、時間をかけて成立してきた風景でもある。そのような景観形成の仕組みを今回3つの都市とそこを走る路面電車を中心に紹介してきた（会報46号、47号参照）。17都市にある路面電車の中のほんの一部であるが、公共交通のあるべき姿と新たな方向性が垣間見えてきた気がする。そんな中、今春、北関東の宇都宮市で新たに次世代型路面電車が開業することになった。人々の有効な移動手段に役立ち、生活を向上させていくのはもちろんであるが、街のデザイ

ンとマッチした魅力的な都市景観になることを私たちは強く期待しているのである。開通したら直ちに現地で体験してみたいと思う。（おわり）



福井市街

王子～駒込 まち歩き

丹羽譲治

9月24日、11時にJR王子駅に集合しました。

音無親水公園を經由して飛鳥山公園に向かった。飛鳥山公園には3つ博物館があり、その内の北区飛鳥山博物館を訪れました。2階の特別展示室で「人間国宝奥山峰石と北区の工芸作家展」が開催されていてご本人が作品の説明をされていました。

1階では復元された奈良・平安時代の木材の重量感のある豊島郡衙正倉が迎えてくれる。常設展示室は、大地のおいたちから始まる歴史や生活文化と荒川の生態系を映像、住居内部の復元とジオラマにより見学者を飽きさせない展示であった。建物は2008年に改修工事が行われ来年25周年を迎えるとは思えない程状態が良く、建物は維持管理が重要であることを再認識させてくれました。

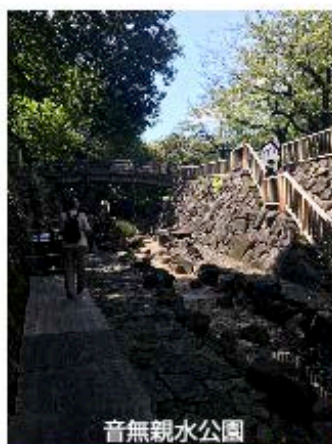
飛鳥山公園内の旧渋沢庭園に現存する青洲文庫と晩香廬を訪れるも入場券は渋沢栄一資料館での購入とこのことで訪問は旧古河庭園の薔薇の開花時期に合わせて5月、6月にしたい。

次に訪れた伊邪那岐命・伊邪那美命など7柱の神々が祀られている七社神社は、氏子である渋沢栄一ゆかりの神社でした。

パワースポットで有名な平塚神社をお参りました。参道が駐車場となり、景観を損ねていたのが残念でした。

旧古河庭園の洋館と西洋庭園は、ジョサイア・コンドルの設計で、彼は工部大学の教授として辰野金吾、片山東熊等を育て近代建築に多大な影響を及ぼしました。まち歩きで訪れた旧岩崎邸住宅も設計しました。2階では運よく特別展「旧古河邸とジョサイア・コンドル」が開催されてました。コンドルの設計図、河鍋暁斎に師事した絵画と日本文化関連の著作本が展示されていました。達者な筆致は、暁斎に弟子として認められるに足る腕前でした。コンドルの日本文化に対する興味は多岐に渡り実践することで理解を深め、建築に結びついたと思われます。内部は1階が洋、2階が和とされていますが、2階は展示室以外公開されてません。ホームページの動画で見るのではなく和空間を体験したい。洋館の外壁は新小松石(真鶴産)で力強く、庇や樋もデザインされ、窓の金具も目を楽しまてくれる。日本庭園は、7代目小川治兵衛によるもので、自然を生かした作庭が心地よい。京都の無鄰菴を訪れた事があり琵琶湖疏水を生かした作庭が素晴らしかった。

この後、霧降商店街の懐かしさを楽しみ、駒込駅近くの焼き鳥屋の行列に誘われ、安くて美味しい焼き鳥を堪能しました。隣席の若者との会話も弾んだ「まち歩き」でした。



音無親水公園



音無親水公園



飛鳥山公園



青洲文庫 1925年 田辺淳吉 設計



晩香廬 1917年 田辺淳吉 設計



平塚神社



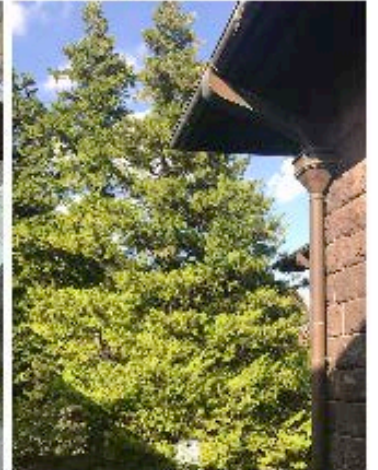
旧古河邸



庇



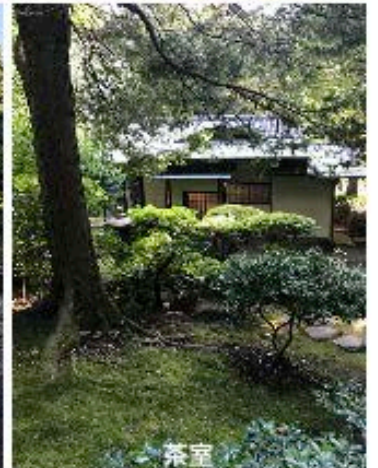
窓金具



巨大な灯籠



池泉回遊式日本庭園



茶室

まち歩き 神保町界限

石見茂夫

(ワテラス)

2022年12月3日(土曜日)、今年最後のまち歩きが神保町界限で行われました。午前11時にJR御茶ノ水駅に集合して、まずは御茶ノ水駅の南東の淡路町に新しくできたワテラスを訪問した。

ワテラスは「ワテラストワー」と「ワテラスアネックス」の2つの建物で構成されており、再開発事業の総面積は2万2千㎡です。オフィス、レジデンス、学生マンション、商業施設、コミュニティ施設(ホール、ギャラリーなど)で構成されています。ワテラスは「和」「輪」「環」の3つのWAをコンセプトにデザインされ、施設は地域住民、就労者、学生、来街者が自由に活動し交流し憩う、新しいコミュニティがはぐくまれる場所の提供を目指しているようであった。

訪問当日も、地域の警察署、消防署、首都高速管理事務所の合同イベントが行われており、多くの人で広場や園地は大賑わいでした。再開発がおこなわれて計画的に整備が進むと環境や景観に配慮された施設が出来て近隣住民の住環境も改善されるのでしょうか。再開発の隣接地には千代田区立の淡路公園が整備されておりワテラスの広場と一体利用されている。官民連携のまちづくりは今後も地域の活性化を考慮すると有効であろう。



(山の上ホテル)

淡路町からは日本大学の歯学部や理工学部、明治大学のある大学街の新しい校舎を見ながら山の上ホテルに向かった。ホテルは明治大学に囲まれた閑静な丘の上に建ち「山の上ホテル」の名が似合っていた。

本館はアールデコ調の鉄筋コンクリート造で、アメリカのウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計により1937年に完成した。ホテルとしての開業は建設当時の建物が1954年にGHQの接收の解除により実現した。

ホテル名は、GHQ接收時代にアメリカ陸軍の女性軍人・軍属の間で建物の愛称になっていた「Hilltop」が起源で「山の上ホテル」と名付けられたと言われている。

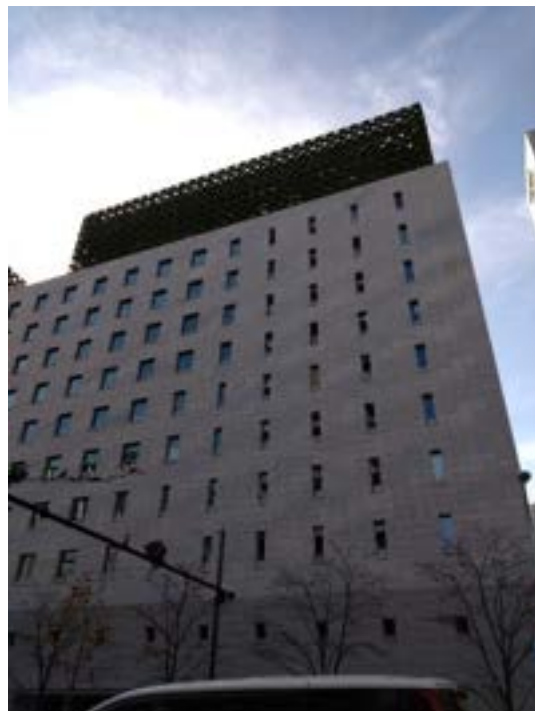
当時多くの出版社が密集していた神田に近いところから、多くの作家が滞在するホテルとして利用された。そのため「文化人のホテル」として知られており、川端康成、三島由紀夫、池波正太郎、伊集院静らの多くの作家が定宿としていた。

山の上ホテルから駿河台下交差点を横切り、神田すずらん通りに入った。ちょうど三省堂の解体工事の最中でこの近辺も変貌の真っ最中と言う感じであった。通りの両側に有る古本屋や小さな画廊を散策しながらのぞき見をして、路地裏の「さぼうる」でサンドイッチやケーキの簡単な昼食となった。食事ができる「さぼうる2」は昼食時とあって長い行列ができていた。相変わらずの人気店で若い人達が沢山集まっていた。



(小学館本社ビル)

昼食後は学士会館に立ち寄ったが昔から変わらずの佇まいであった。はす向かいの小学館は建て替えが済み新しいビルに成っていた。緑の少ない神保町近辺であるが屋上に大きなウォールを設置していた。ビルの高層の屋上部分の緑化は後々の管理が難しいと思われた。調べて見ると設計当初から屋上に緑化ウォールを建設するための方策が考えられていた。ビルの全体設計は日建設計、建設工事は鹿島建設、緑化設計と工事は西武造園が担当した。それぞれが日本でのトップクラスの専門企業で難しい緑化工事に挑戦したように思えた。緑化ウォールのメンテナンスを行うために市松模様のデザインに仕上げ高所であっても裏側から安全にスタッフが管理できる構造に作られていた。



(九段会館テラス)

神保町交差点を九段下に向かい九段会館を訪問する。旧九段会館は登録有形文化財に指定されており、東急不動産により再開発が行われた。「水辺に咲くレトロモダン」と言うコンセプトもと古い九段会館の正面ファサードを保存復元して17階建ての最新鋭オフィスビルとして誕生しました。歴史的建造物を創建当時の素材を生かした保存復元部分と最新鋭の建築部分が上手く融合されていた。

お堀端に整備されたテラスはオフィスの入居者だけでなく訪問者や近隣の住民の癒し空間として利用されていた。



(昭和館)

九段会館テラスから園路で結ばれている隣接地にある昭和館を訪問した。

昭和館は昭和の時代に起こった太平洋戦争の戦中・戦後の生活に係わる歴史的資料や情報を収集し保存と同時に展示して、次世代に伝える国立の施設として平成11年(1999年)に開設された。建物は菊竹清訓の設計で運営管理は日本遺族会が行っているとの事であった。

昭和時代の生活用具の展示や当時の映像等を使い訪問者に判りやすく昭和の暮らしの模様を伝える施設となっていた。



<LFJブックレビュー 78>

『戦争論』 ロジェ・カイヨワ著 秋枝茂夫訳

1974年12月刊 法政大学出版局（原書：1963年刊）

斉藤全彦

プーチンがウクライナ侵攻を突如始めたとき、自分が生きている時代に、また、この21世紀という進歩した時代に、まさか戦争が勃発するとは！という思いに駆られた人が多かったのではないかと。21世紀には、もし戦争が始まる時には核戦争に終始する筈であるからして、戦争は起ることはない。戦争もどきが起ってもそれは紛争程度であり、本気で侵略戦争を宣言して戦争を始める国などある筈はないと思われていた人が多いのではないかと。しかも、その国がG20の加盟国であるロシアである。必要悪と称す核兵器がありながらも21世紀は戦争を抑止できなかったことになる。

近代において戦争というものに関する著作は何といってもかのクラウゼヴィッツ（1780-1831）による『戦争論』（1832年刊行）を筆頭にあげられよう。生粋の職業軍人であった彼はナポレオン（1769-1821）やフリードリヒ大王（1712-1786）と同時代の人間であることを前提にしなければならない。その思想の根底は「戦争は他の手段を以ってする政治の延長である」ということで、あくまでも戦争を操縦する主体は政治を大前提とするものであった。

ロジェ・カイヨワの『戦争論』は戦争が人間の集団とどのように関わってきたかを古代から現代に至るまでの道筋を追いかける作業を提示する。即ち、第一部では「戦争と国家の発達」として人類が戦争を活用してどのように国家という集団を形成してきたかを示している。先ず、原始的戦争から戦争と国家の発生、そして近代になると帝国戦争と称する集団的紛争と化す。次に古代中国の戦争がいかに戦争の本筋を形成してきたかを示し、歩兵の出現が民主主義の思想の根幹となる。そして、第二部「戦争の眩暈」では、先ず、近代戦争の諸条件として、フランス革命によって市民権を得た人々は「兵役と選挙権とによって市民は一つの新しい尊厳を得た」ことになり、「軍服と選挙公報とは、市民が獲得したところの平等の目に見える印であり担保であった」となる。即ち「戦争は市民全体に対する奉仕であり、市民意識の試金石であった」と。市民一人ひとりの意識として「戦争は市民に、市民一人ひとりの価値を証し、市民はこの戦争により、公共の善に対する彼の忠誠を示した」ことになる。ここに「国家は徴兵制により、死をともしある特定の目的に向けて、全市民を掌握するようになった。ここで国家は支配者として登場することになる」と。

人間と人間との争いごとから、集団と集団のぶつかり合いにまで発展し、それが単なる個人では支配できぬほどの国家レベルまで発展するという、この民衆を見下す国家の胎動にまで発展する戦争の本質とは何であろうか。カイヨワはその顕現を「祭りの本質」の中に見ようとする。「戦争の実態は祭りの実態にあい通ずる。」

しかし、カイヨワはまるで諦めるかのように嘆息する。「戦争と平和の周期は、祭りや平時の周期と同じである。」それでは戦争とは永遠にこの人類社会から排除できないのであろうか。彼は辛くも祈るように言っている。戦争に至らぬようにする「教育」こそが必要不可欠であり、そこにこそエネルギーを注ぎ込むべきである、と。（斉藤全彦）



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

